

作家の概念は、今や当たり前のように個人に主体を置いて話されている。しかし個人ではなく思想に置き換えたとき、このときの思想という概念の中には、全く個人が存在しない。思想を個人と捉えたとしても、ニュートラルな個人は存在し得ないことになる。ここでは個人を空虚なアイデンティティとして捉える。個人は他者^公に脅かされていて当然である。

美術史において、一体誰がその「運動」を個人と見做しただろうか。

そう、周知の通り、個人の概念は誰も測れない。個は公のみにて存在する稀有な実体である。

この芸術の正確な形成には、同時多発的に運動する“ドローイングのような”試みが必要である。基体となる^{マテリアル}質料とも相互して、大雑把で偶発的な始動因としての運動が、恐らくアートにとっての要である。